

デモ圃場の創意工夫 <その6>

デモ圃場の創意工夫とは

本シリーズでは耕種がこれまで取り組んできたデモ圃場の創意工夫の事例を紹介してきた。最終回である本稿では、それらの特徴を振り返って考察してみたいと思う。

第一回ではデモ圃場を設置する際の要点のひとつとして、「当該技術が現地農家にとって有用かつ適用できるものでなければならない」と述べた。しかしながら有用技術というのは現場の農家や営農レベル、社会的な状況に応じて変化するものである。第二回で取り上げたパレスチナの「進化するデモ圃場」では、7年に及ぶプロジェクトの中で、デモ圃場で取り扱う技術を段階的に変化させてきた事例を紹介した。これは普及する技術、すなわち求められる技術が変化している現状を、農家との双方向的なやり取りを通して見逃さずにいたためにできたことである。

第四回でとりあげたスーダン国リバーナイル州の「ストーリー性を持たせたデモ圃場」の事例では、油糧作物普及のために、栽培技術のみならず、その後の搾油、マーケティングまでの一連の流れを紹介した。これは油糧作物を「紹介する」のではなく、「普及する」視点にこだわっていたからこそたどりついた手法と言える。農家が新規作物を導入する際、当該作物を「栽培する」と同時に、「どう売るか」は重要な関心事である。このデモ圃場は農家が当該作物を営農体系に取り入れた際の具体的なイメージを提供することで、関心を捉えることができ、ただ作物が植わっている圃場を見せるだけのデモ圃場に比べて、はるかに効果的な普及効果を得ることができた。

第一回で言及したデモ圃場の失敗の一つに、地域のリーダー的な農家に外部からリソースを投入して作る「特別な」デモ圃場がある。この「特別な」デモ圃場では技術が普及しないどころか、選ばれた農家だけが得をし、住民間の嫉妬をもたらすことにもなる。デモ圃場を設置する際は、デモ圃場を通じて意図する技術がどのように農家に伝

わっていくか、明確なイメージが描けていなければならない。第三回で紹介したスーダン国カッサラ州の「農家参加型・コストシェア型のデモ圃場」の事例では、興味のある農家にデモ展示のコストの一部を負担してもらう手法を紹介した。農家が自ら手を上げ、負担を負ってでも新しい技術に挑戦するこの形式は、住民間の不公平感を抑え、やる気のある農家に技術を普及していく具体的なイメージが描けている。

第一回で、デモ圃場の主な役割として「実証」「周知」と共に「技術移転の場」としての役割を挙げたが、第五回で紹介したウガンダ北部の事例は「技術移転の場」としての性質が強いように思われる。確かに、農家グループはデモ圃場において、栽培技術と資金準備、営農の考え方まで実践的に学んだ。しかしながら、彼らは同時に、プロジェクトの推奨する営農スタイルが、彼らに実践可能かどうかを、彼ら自身で「実証」したともいえる。そして自ら参加はしていなくても、彼らをよく観察している近隣住民が周囲にはいた。その中からはグループメンバーに教えを乞う農家も出てきており、このデモ圃場は、十分に「実証」と「周知」の役割も果たしていたといえる。

デモ圃場は優れた普及ツールであるが、ただ設置するだけで、周りの農家が見て学び、技術が自然と普及するということはあると得ない。デモ圃場を設置する際は、当該技術の性質や適用性と農家の状況を理解したうえで、「どう見せるか」「どう伝えるか」を工夫して、はじめてデモ圃場は優れた普及ツールとしての役割を果たすのである。



フィールドデー（北部ウガンダ）：グループメンバーが近隣住民にデモ圃場で学んだ技術を紹介する機会を設けることにより、農家間普及が促進するように工夫した。